
家庭廃棄物（ごみ）に対する住民の意識と行動に関する調査

調査主体：生活環境研究会

2005年12月

（代表：海野道郎 東北大学大学院文学研究科教授）

先日は、私どもが企画しました標記調査に御回答頂き、誠にありがとうございました。皆様の御理解により、貴重な調査結果を得ることができ、深く感謝しております。

このたび、調査結果のお知らせを作成いたしましたので、ご覧いただければ幸いです。この小冊子は、主な項目について集計結果を要約したものです。ただし、なるべく早く結果をお知らせしたいということから、結果は確定前の数値（速報値）を用いておりますので、後ほど一部修正の可能性もあります。今後、さらに調査結果をまとめたあと、詳しい分析を行う予定であります。また、これらの結果に関する記者発表を行う予定であります。今後の発表資料などはホームページに掲載しますので、ご覧いただければ幸いです。

【生活環境研究会】

今回の調査主体である「生活環境研究会」は、次のようなメンバーで構成されています。

- ・研究代表者：海野道郎（東北大学大学院文学研究科）
- ・研究分担者・代表者補佐：長谷川計二（関西学院大学総合政策学部）
- ・研究分担者・事務局：篠木幹子（岩手県立大学総合政策学部）
- ・研究分担者：小松洋（松山大学人文学部）・土場学（東京工業大学大学院社会理工学研究科）
阿部晃士（岩手県立大学総合政策学部）・村瀬洋一（立教大学社会学部）
中野康人（関西学院大学社会学部）・中原洪二郎（奈良大学社会学部）
- ・研究協力者：工藤 匠・奥野貴彦（東北大学大学院文学研究科大学院生）

生活環境研究会について、詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/behavsci/frame-j.html>

なお、御質問などがありましたら、下記にお願いいたします。

022-795-6035（海野） 019-694-2728（篠木）

内容をご覧いただくにあたって

- 1) 各グラフの数字は、とくにことわりがない限り、水俣市（639票）、名古屋市（466票）、仙台市（617票）ごとの集計に対するパーセントです。ただし、小数点以下は四捨五入しています。また、非常に小さい値（パーセンテージ）は表示していませんので、合計は必ずしも100%にはなりません。
- 2) わからない／答えない（Don't Know / No Answer）回答は除いて分析しています。
- 3) 複数回答とは、「あてはまるものをいくつでも選んでください」という形式の間です。
- 4) グラフの数値は速報値ですので、他に引用される場合は生活環境研究会までご連絡ください。

1. 調査の概要と調査地点の制度の特徴

1.1 調査の目的

環境問題、とくに家庭ごみに関する市民の意識と行動を知ることによって、廃棄物政策の改善に貢献するとともに、人間行動と制度の関わりについての科学的理解を深めることがこの調査の目的です。

1.2 調査の方法

はじめに、家庭ごみの処理に関して特徴的な政策を採用している熊本県水俣市、愛知県名古屋市、宮城県仙台市を全国の都市の中から選びました。次に、各市の市民の皆様の中から 1000 名の方を無作為に選び、それぞれのご家庭で「主に家事を担当しておられる方」に回答を依頼しました。調査票は郵便で送付し、調査を委託した「社団法人 中央調査社」の調査員がご家庭を訪問し調査票を回収しました（一部は郵送で返送をお願いしました）。10月13日（木）から11月18日（金）の間に、総計 1722 名（水俣市 639 名、名古屋市 466 名、仙台市 617 名）の方から回答が寄せられました。

1.3 調査地点の制度の特徴

ごみ収集・処理の制度は市町村によって異なります。今回調査にご協力いただいた、水俣市・名古屋市・仙台市の分別制度は以下の通りです。

水俣市が最も多く 22 種類です。名古屋市や仙台市と比べると、色による瓶（びん）の細分化、なべ・釜類の分別、生ごみを燃やすものと分けている点が特徴的です。ごみの収集には、市が行うもの、集団資源回収、スーパーなどでの店頭回収といった方法があります。水俣市は 22 種類すべて、市が回収しています。トレイはスーパーでも回収しているようです。名古屋市は、新聞・雑誌・ダンボール・古着などを、PTA や子供会の集団資源回収や、なごや古紙リサイクル協議会で集団資源回収しています。また、仙台市では紙類を、集団資源回収だけではなく、紙類回収庫（市民センターやみやぎ生協に設置）や紙類回収キャラバン（スーパーの駐車場で定期回収）によって回収している点が他の地域と異なっています。

水俣市	名古屋市	仙台市
生きびん/透明びん/水色びん/茶色びん/緑色びん/黒色びん/ スチール缶/アルミ缶/なべ釜類/ ペットボトル/廃プラスチック類/ 新聞/ダンボール/雑誌・その他紙類/ 布類/ 破碎/埋立/ 電池類/蛍光管電球類/ 粗大/ 燃やすもの/ 生ごみ	空きびん/ 空き缶/スプレー缶類/ ペットボトル*/プラ製容器包装/ 新聞(集)/段ボール(集)/紙容器包装/雑誌(集)/紙パック(拠点)/ 古着など(集)/ 不燃ごみ/ 粗大ごみ/ 可燃ごみ	再使用びん(集)/ガラス・びん/ 缶類アルミ缶(集)/ ペットボトル/プラ製容器包装/ 新聞・ちらし/段ボール/雑誌・雑紙類/紙パック/ 布類(集)/ 廃乾電池/類蛍光管/ 粗大ごみ〔有料〕/ 家庭ごみ

凡例：(集)集団資源回収、(拠点)スーパー店頭などの回収ボックス

*注：名古屋市はペットボトルをスーパーなどの回収ボックスでも集めている。

2. 回答者の特徴

2.1 回答者の性別

はじめに、どのような方が、この調査に回答したのかをみてみます(図2.1)。世帯の中で家事を主に担当している方に回答をお願いしたため、水俣市、名古屋市、仙台市のどの市をみても、回答者の85%以上が女性となっています。

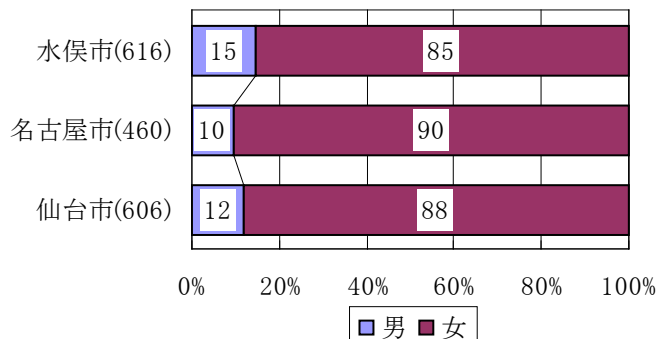


図2.1 性別の内訳

2.2 回答者の年齢

図2.2は回答者の年代を示しています。仙台市では、20歳代以下の回答者が全体の11%ですが、水俣市と名古屋市では全体の5%以下となっています。30歳代は、水俣市と仙台市では15%前後であるのに対して名古屋市は21%と多少多くなっています。40歳代、50歳代はどの市においても20%強となっています。また、60歳代の割合がどの市においても最も高くなっており、水俣市は36%を占めていることがわかります。

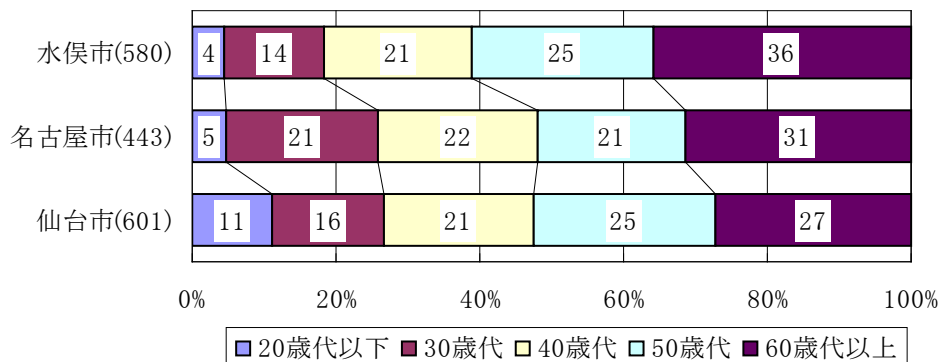


図2.2 年齢の内訳

2.3 移動経験の有無

図2.3は回答者の移動経験の有無を示しています。これを見ると、水俣市と名古屋市では、生まれてからずっと同じ市に住んでいる人が約50%となっています。これに対して、仙台市は、移動経験がある人が66%を占めていることがわかります。

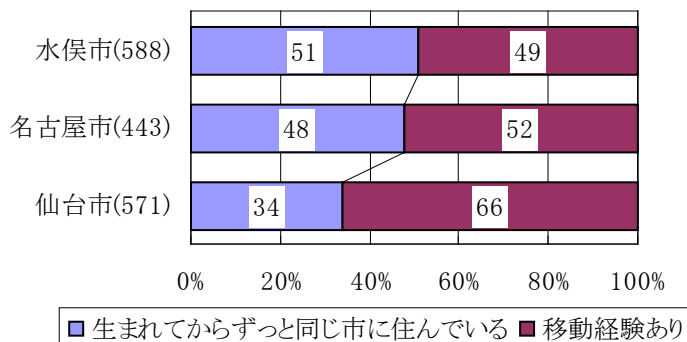


図2.3 移動経験の有無

3. ごみの分別行動

3.1 水俣市の資源物の処理方法

ごみの分別制度は、3市でそれぞれ異なっているので、地点ごとに整理していきます。

水俣市では、ペットボトル・アルミ缶・新聞・卵パックはいずれも「資源になるもの」として収集されています。回答結果も「資源になるもの」が最も多く、ペットボトル 78%・アルミ缶 78%・新聞 72%と7割から8割弱の回答がみられました。卵パックは若干少なく、58%でした。これら4つの品目に対する処理方法の中で次に多かったのは「地域の集団資源回収」で、それぞれ2割弱が、そのように回答しています。両者を併せて、制度に即して資源を処理（以下「制度準拠」）しているとの回答は、新聞で90%となりました。「スーパーなどの店頭回収」も併せて、ペットボトルの制度準拠率は96%、アルミ缶は94%、卵パックは80%です。

牛乳パックで最も多かったのは、「スーパーなどの店頭回収」の46%で、「燃やすもの」34%、「資源になるもの」10%と続きます（制度準拠56%）。また、食品トレイは「資源になるもの」が最も多く、44%であり、次に「スーパーなどの店頭回収」が32%となっていました（制度準拠76%）。

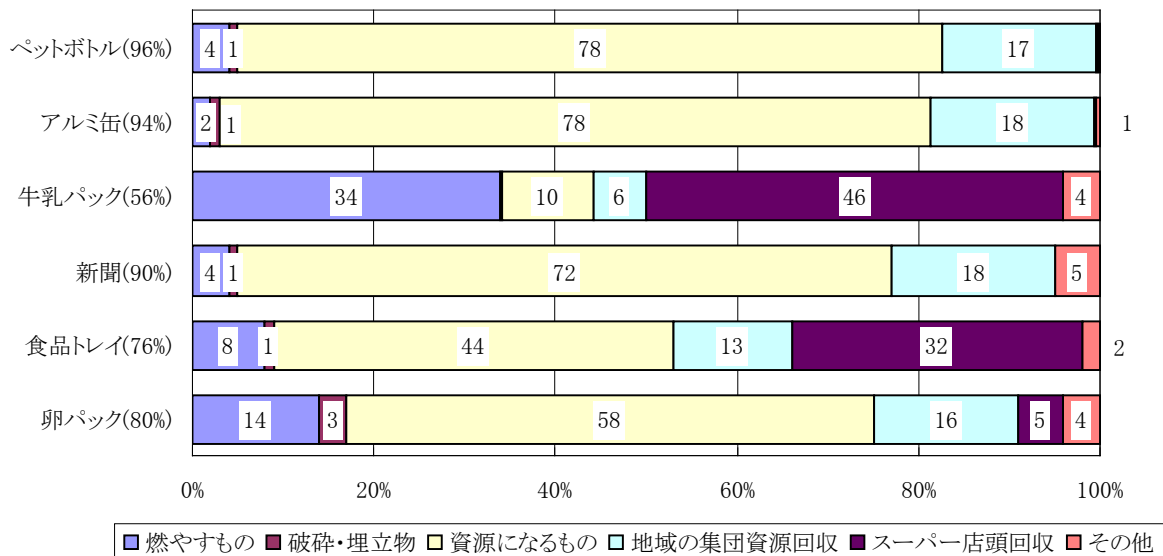


図3.1 水俣市の資源ごみ処理状況(品目の数値は制度準拠率)

3.2 名古屋市の資源物の処理方法

名古屋市では、ペットボトルとアルミ缶は資源として市が回収しています。ペットボトルはスーパーなどの回収ボックスでも集めています。ペットボトルでは「資源として市の回収へ」の80%、「スーパーなどの店頭回収」15%と併せて95%が制度準拠といえます。アルミ缶も「資源として市の回収へ」が72%と最も多く、次いで、PTA や子ども会による「集団資源回収（一般方式）」の17%と続きます（制度準拠89%）。

牛乳パックはスーパーや区役所などの回収ボックスの利用を市が推奨しており、「スーパーなどの店頭回収」34%、「資源として市の回収へ」28%との回答が多くなっています。次に多かった回答は「集団資源回収（一般方式）」の14%でした。これら合計の76%が制度準拠です。「可燃ごみ」として出しているとの回答は10%でした。

新聞で最も多かったのは「集団資源回収（一般方式）」46%、「集団資源回収（学区協議会方式）」34%といった、地域の集団資源回収制度を利用したものでした（制度準拠80%）。

食品トレイと卵パックは「資源として市の回収へ」が最も多く、トレイ71%、卵パック85%でした。「スーパーなどの店頭回収」はトレイ22%、卵パック3%となり、制度準拠率はトレイ93%、卵パック88%となっています。

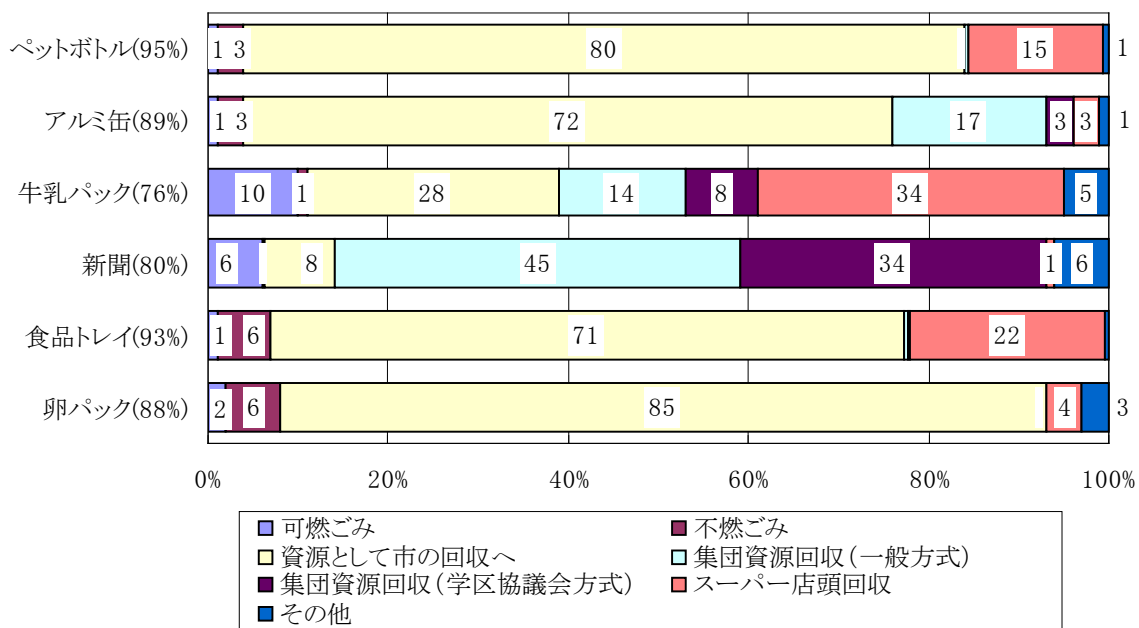


図3.2 名古屋市の資源ごみ処理状況(品目の数値は制度準拠率)

3.3 仙台市の資源物の処理方法

仙台市で、ペットボトルの分別についての回答で最も多かったのは「プラスチック以外の資源（市の表現では、缶・びん・ペットボトル・廃乾電池類）」で49%でした。「スーパーなどの店頭回収」は少なく約3%ですが、両者を併せて52%が制度準拠となります。

アルミ缶の分別に関する回答結果は、「プラスチック以外の資源」が最も多く63%、次に、「地域の集団資源回収」の16%であり、これらで全体の79%が制度準拠をしているといえます。

牛乳パックと新聞は、「地域の集団資源回収」「紙類回収庫」「紙類回収キャラバン隊」で収集しています。また、牛乳パックは「スーパーなどの店頭回収」に出すこともできます。牛乳パックの分別方法で最も多かったのは、「家庭ごみ」の43%でした。「スーパーなどの店頭回収」35%が続きます。「紙類回収庫」に出すとの回答は1.3%、「キャラバン隊」は0.5%でした。4割強の回答者が焼却、4割弱が制度準拠をしていることとなります。新聞で最も多かったのは「地域の集団資源回収」の68%です。「紙類回収庫」10%、「キャラバン隊」を8%併せて86%が制度準拠の処理をしていることとなります。

食品トレイと卵パックは「プラスチック製容器包装」（制度準拠）として収集されています。この回答が、卵パック76%、食品トレイ59%と最も多く、次に、「スーパーなどの店頭回収」（制度準拠）で卵パックが12%、食品トレイは28%でした。

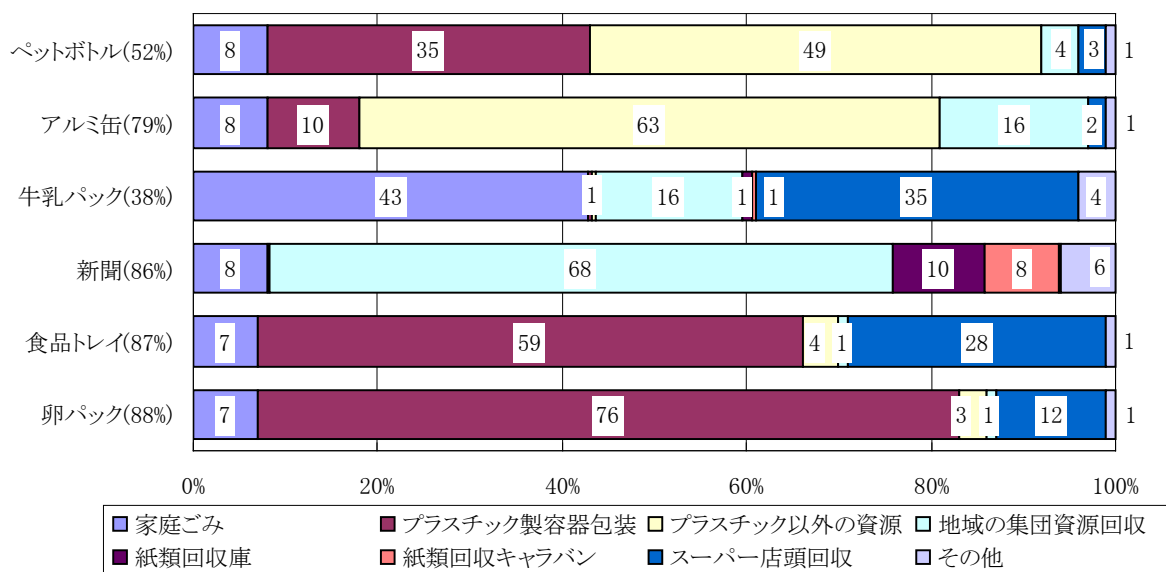


図3.3 仙台市の資源ごみ処理状況(品目の数値は制度準拠率)

3 都市ともペットボトルは個別に市が収集しています。水俣市と名古屋市では、「ペットボトル」として出しているとの回答が80%程度でしたが、仙台市では49%でした。仙台市では「プラスチック製容器包装」として出しているとの回答が35%見られました。また、牛乳パックを可燃物として出しているとの回答が仙台市と水俣市で少なからず見受けられました。これらの原因については今後の検討課題です。

4. ごみ分別に対する考え方

4.1 ごみの分別作業を楽しむのは難しい

ごみの分別作業が楽しいと思う人の割合をみてみましょう（図 4.1）。作業が楽しいと「思う」人はそれほど多くなく、水俣市では 6%、名古屋市、仙台市では 3%となっています。また、「どちらかといえばそう思う」人は、水俣市、仙台市で 17%、名古屋市で 13%であり、作業の楽しさに対して肯定的な評価をしているのは合わせて 2 割前後です。これに対して、「どちらかといえばそう思わない」人は、水俣市で 44%、名古屋市、仙台市では 42%、「そう思わない」人は、水俣市で 33%、名古屋市で 41%、仙台市で 37%となっており、8 割前後の人は分別作業の楽しさに対して否定的であることがわかりました。この中で、最も分別数の多い水俣市において、「楽しい」と回答している人がわずかであるにしても多いことが注目されます。

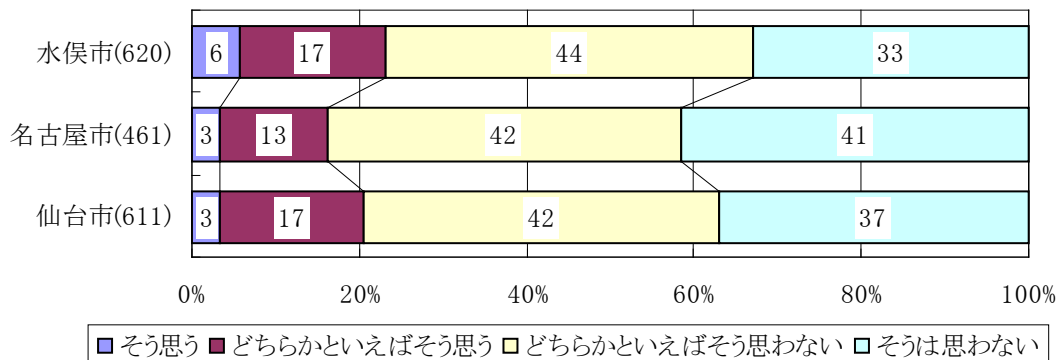


図4.1 ごみの分別作業が楽しいと思う人の割合

4.2 分別数が多いほど手間や時間がかかる

では、ごみの分別は、なぜ楽しくないのでしょうか。ごみの分別や排出に手間や時間、お金などのコストがかかると思うかどうかを「そう思う」から「そうは思わない」までの 4 段階で尋ねました。図 4.2 は『そう思う』と答えた人（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下『』は同様の意味）の割合を 3 都市で比較したものです。

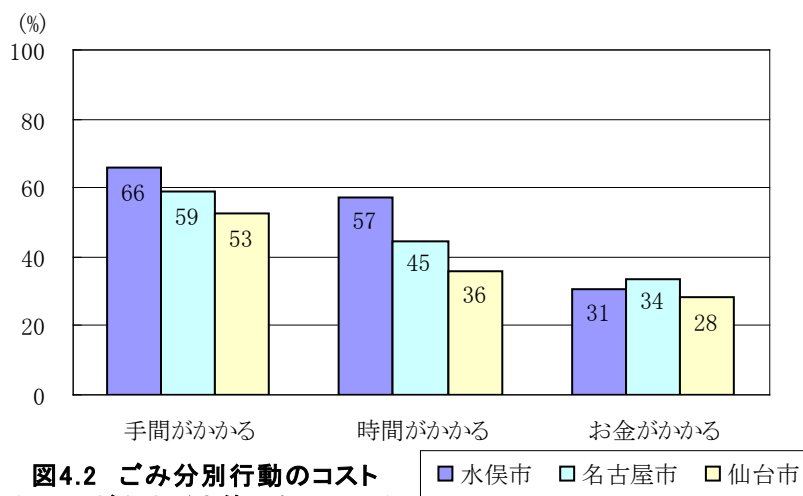


図4.2 ごみ分別行動のコスト
(コストがかかると答えた人の%)

3 都市ともに、いち

ばんだ大きなコストは「手間がかかる」ことであり、「時間がかかる」、「お金がかかる」の順に小さくなっています。しかし、その割合は、都市によって異なります。コストがかかると答えた人の割合は、「手間」「時間」ともに、水俣市が一番多く、仙台市が一番少なくなっています。分別数の多い都市ほど、「手間」や「時間」がかかると思えた人が多いことが分かります。

4.3 分別の最大の障害は保管場所。都市によって違う障害

ごみを分別するとき「家の中に物をためておく場所がない」（以下、貯蔵場所なし）、「分別の方法が分かりにくい」（以下、分別方法難解）、「回収場所まで持っていくのがたいへんだ」（以下、運搬労力大変）などが「障害になっている」かどうかを、「非常に障害になる」から「まったく障害にならない」までの4段階で尋ねました。図4.3は、『障害になる』と答えた人の割合です。

それに対する回答は、都市によって異なっています。貯蔵場所の確保が最大の障害であることは共通していますが、分別方法の知識と回収場所までの運搬を比較すると、水俣では「運搬労力大変」という人が「分別方法難解」という人よりも多くなっていますが、仙台ではその逆であり、名古屋は両者がほぼ同程度です。21品目という細かい分別を行っている水俣よりも6分別の仙台市の方が「分別方法が難解だ」という人が多いのは意外であり、その理由を探求する必要があると考えられます。運搬労力を障害に挙げる人が水俣で一番多いのは、制度の影響もあるかもしれませんが、他の市に比べて高齢の回答者が多いためとも考えられます。

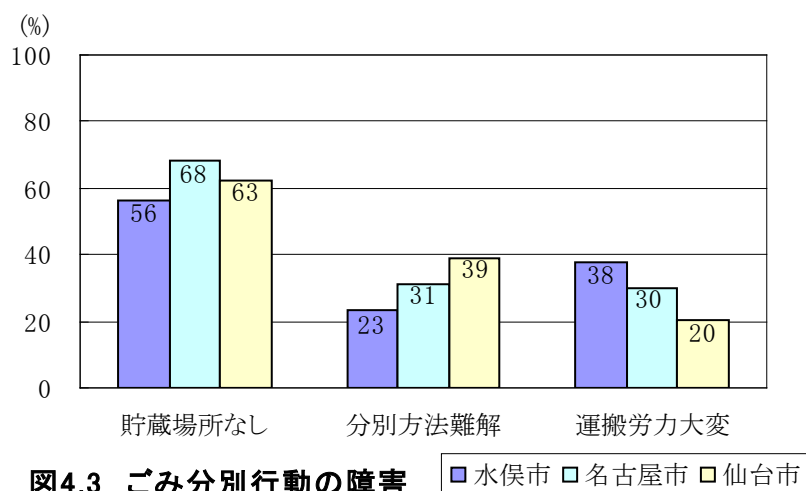


図4.3 ごみ分別行動の障害
（『障害になる』と答えた人の割合）

4.4 ごみ分別は良いことなのか？

ごみ分別行動の社会的有効性を、人々はどのように思っているのでしょうか。3つの意見に対して「そう思う」から「そうは思わない」までの4段階で回答を得ました。

その結果は図4.4のとおりです。「個人がごみを分別しても住んでいる市全体のごみは減らない」と考える人は4割前後であり、半分弱の人がごみの減量に対する効果について悲観的です。しかし、「ごみを分けて出せば、最終処分場（埋立地）が長持ちする」と考える人は各市とも85%おり、この点では有効性を信じているといえるでしょう（図4.4には、この質問に否定的に答えた人の割合を示しました）。他方、「自分のやっているごみの分別は本当に環境に良いのか分からない」という意見に賛成した人の割合は、都市によってかなりの違いがあります。仙台と名古屋では4割前後が懐疑的なものに対して、水俣では2割強と相対的に少なくなっています。

他の問いに対する回答傾向との考え合わせると、細分化を要求する水俣市のごみ分別制度は、仙台や名古屋と比較したときに次のような特徴を持っています。すなわち、水俣市のごみ分別制度を支えているのは、分別は手間や時間がかかり回収場所までの運搬も大変だと感じつつも、細分化された分別方法の意味を理解し、分別が環境に対して及ぼす好影響を確信している水俣市民なのだ、といえるでしょう。

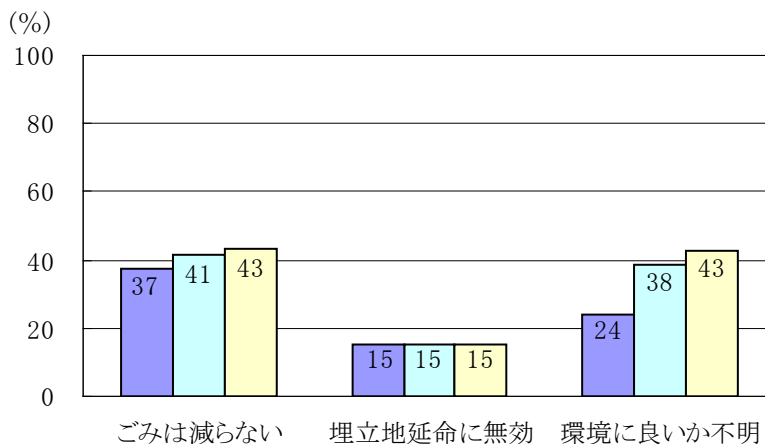


図4.4 ごみ分別の効果に対する懸念 (『そう思う』人の割合)

4.5 ごみ分別は公共的なルールとみなすべき

一般に、私たちがごみ減量などの環境に配慮した行動をするかどうかを決めるとき、周囲の人も行っているかどうかや、手間がかかったり快適さが損なわれたりすることを気にしたりすることがあります。調査では、そのようなことを考慮にいらしたうえでもなお環境に配慮した行動をすべきであるかどうかを尋ねました。

その結果、いずれの問いに対しても、『そう思う』と回答した人が全体の約9割以上を占めています(図4.5a)。この傾向は、水俣市、仙台市、名古屋市のいずれにおいてもほとんど変わりありません。ほとんどの方が、

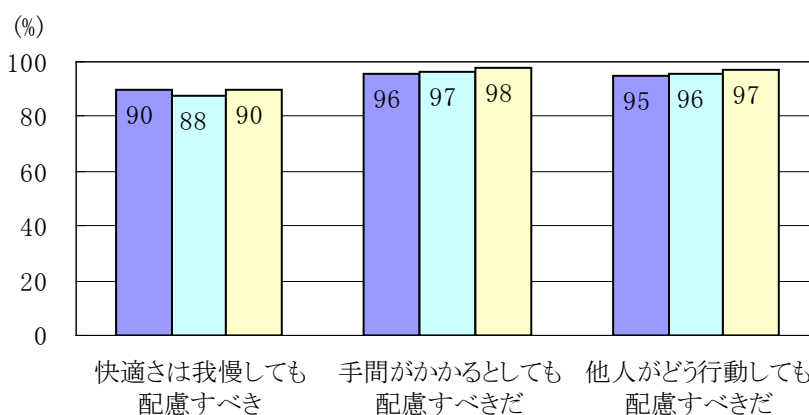


図4.5a 環境に配慮する条件 (『そう思う』と答えた人の割合)

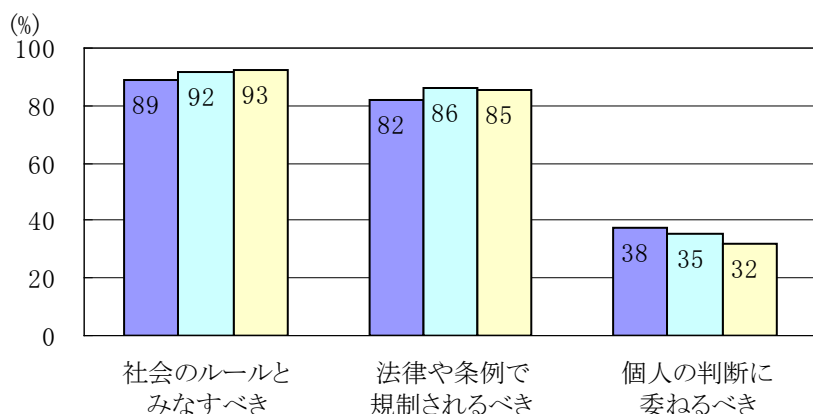


図4.5b 環境に配慮するかどうかの判断 (『そう思う』と答えた人の割合)

周囲の人はどうであれ、あるいは手間がかかったり快適さが損なわれたとしても環境に配慮した行動をすべきだと考えています。

また、環境の悪化につながる行動は法律や条令で厳しく規制されるべきであるかどうか、および環境に配慮するかどうかは社会のルールとみなすべきであるかどうか、について尋ねたところ、水俣市、仙台市、名古屋市のいずれにおいても、『そう思う』と回答した人が8割以上を占めました（図4.5b）。反対に、環境に配慮した行動をするかどうかは個人の判断に委ねるべきか、については『そう思う』と回答した人は3割ほどで、多くの人は環境に配慮した行動をとることは公共的なルールであると考えているようです。

4.6 ごみ問題の原因は住民のモラルと企業の姿勢

ごみ問題が生じる原因には様々なものが考えられますが、市民自身が一般に何が原因であると思っているかを尋ねてみました。その結果、3都市のいずれにおいても、「地域社会全体への影響を考えずに自分の都合を優先してごみを捨てる人が多いから」、「ごみ処理に関するモラルの低い人が多いから」という原因について『そう思う』と回答した人が約9割を占めていました。このことから、ほとんどの人は、ごみ問題の原因の一つが住民のモラルにあると考えていることが分かります（図4.6）。その次に多いのは、いずれの市においても、「企業が利益を優先してごみが増えるような商品を生産し続けているから」という原因で、多くの人は企業の利益優先的な姿勢にも問題があると考えているようです。調査では、その他に「市町村がごみ問題の解決のために必要なリーダーシップを発揮していないから」、「市町村が決めたごみの分別や収集に関するルールに不備があるから」、「安全かつ大量にごみを焼却できるようなごみ処理技術がまだ進んでいないから」という原因もあげておきましたが、これらについては『そう思う』と『そう思わない』がおおよそ半々ぐらいになっており意見が分かれています。

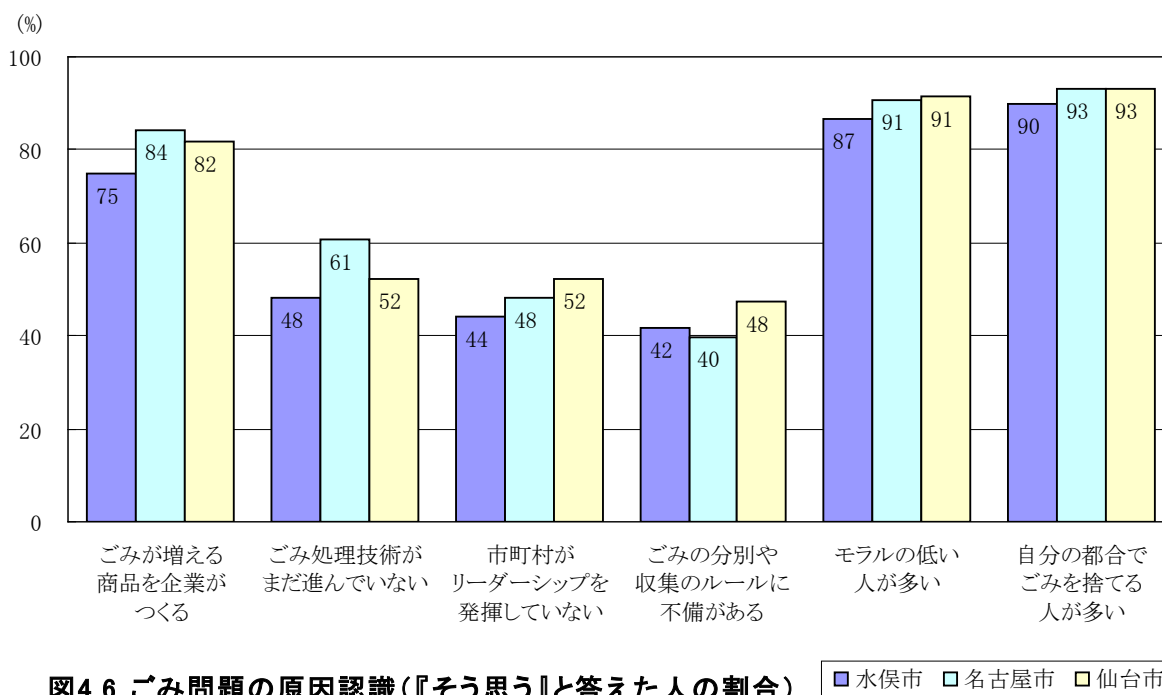


図4.6 ごみ問題の原因認識（『そう思う』と答えた人の割合）

■ 水俣市 □ 名古屋市 □ 仙台市

5. 家庭におけるごみ減量行動とごみ問題の解決

5.1 家庭でのごみ減量は有効だ。でも、・・・。

ごみ問題の解決にとって「各家庭でのごみの減量」がどれくらい役立つかを尋ねました(図は省略)。

「非常に役立つ」と「かなり役立つ」をあわせた回答は、仙台市で80%、名古屋市で78%、水俣市で82%と、ほぼ8割前後の方が家庭でのごみ減量はごみ問題解決のための有効な手段だと考えています。

また、ごみ問題を解決するためには「どれくらいの方がごみ減量を実行する必要があるか」との間には、仙台市と水俣市で約6割、名古屋市で約7割の方が「10割(つまり全員)がごみの減量行動をする必要がある」と回答しています(図5.1a)。

これに対して、「どれくらいの方がごみ減量を実行していると思うか」を尋ねたところ、仙台市では「5割くらい」という回答がもっとも多いのに対して、水俣市では「8割くらい」という回答がもっとも多くなっています(図5.1b)。回答の平均を取ると、仙台市で約5割、名古屋市で約6割、水俣市で約8割でした。名古屋市は仙台市と水俣市の中間に位置するようです。

「ごみ問題を解決するためにはすべての家庭でごみの減量を行う必要がある」と考えている方が60~70%もいるにもかかわらず、「10割つまり全家庭で減量に取り組んでいる」と見ている方は水俣市で若干高いものの、仙台市、名古屋市では数%にとどまっています。「ごみ問題を解決するためには、全家庭でごみの減量に取り組む必要があるが、実際にごみ減量を実行している家庭はずっと少ないのではないか」ということのように、ごみ問題を解決するための「あるべき姿」と「現実の姿」との間には大きなギャップがあるようです。

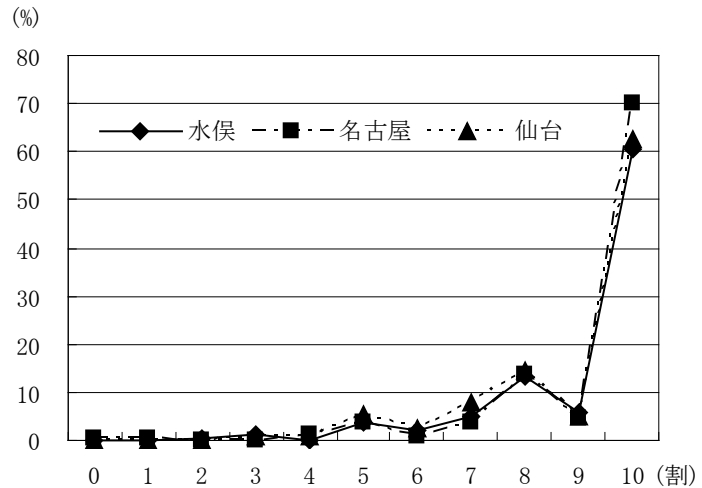


図5.1a ごみ問題解決のために何割くらいの方がごみ減量行動に取り組む必要があるか

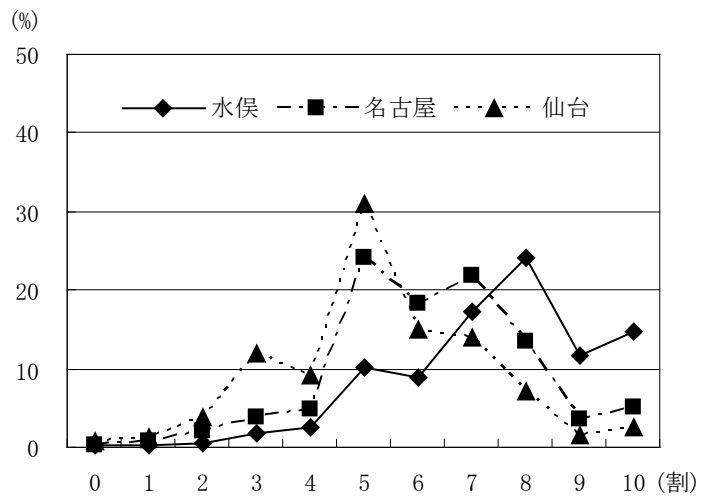


図5.1b 何割の方がごみ減量行動を実行していると思うか

5.2 近所づきあいが活発な人ほど、多くの人がごみ減量行動を行っていると考えています

何割くらいの方がごみ減量行動を実行していると考えているかは、上で見たように、水俣市で最も高く、仙台市で最も低いという結果が得られました。では、なぜこのような違いが見られるのでしょうか。

わたしたちは、こうした違いをもたらすひとつの要因として、近所づきあいの程度が関係しているのではないかと考えてみました。そこでまず、近所づきあいの程度を表す指標として、「世間話をする」、「一緒に外出する」、「互いの家に遊びに行ったり来たりする」、「悩み事などを相談したりされたりする」の4項目について、それぞれ「よくある」4点～「まったくない」1点を与えた上で合計得点を求めました。さらにこの合計得点から、3市全体での平均が50点となるように近所づきあいの程度を表す数値（近所づきあい得点）を計算し、ごみ減量行動者の推定割合との関係を図に表してみました。図5.2を見ると、近所づきあい得点は水俣市で最も高く、また、近所づきあい得点が高いほどより多くの人がごみ減量行動を行っていると考えられる傾向にあるようです。

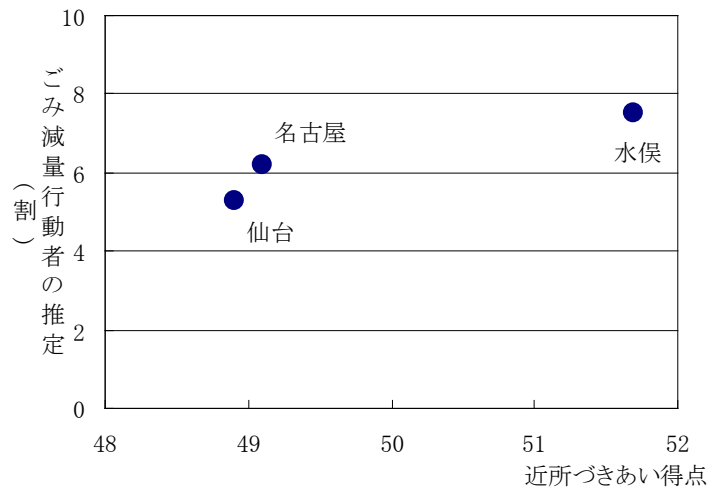


図5.2 近所づきあいと他者のごみ減量行動の認知

さて、今回の調査では、ごみを分別することが近所の人と仲良くなれるよい機会になるのかどうかについても尋ねています。その結果が図5.3です。ごみの分別が近所の人と仲良くなれるよい機会だという考え方に対して、「そう思う」もしくは「どちらかといえばそう思う」という回答の割合は、水俣市で74%と最も高く、次いで名古屋市36%、仙台市26%と続いています。

このように、ごみ分別行動が近所づきあいを促進する機会になると思えるような状況では、より多くの人がごみ減量行動に取り組んでいると認知される傾向にあるようです。

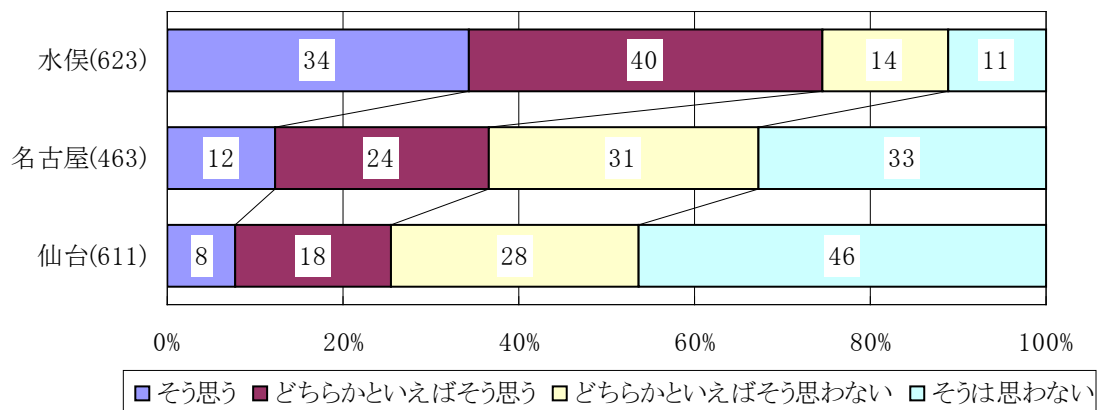


図5.3 ごみ分別は近所と仲良くなれる機会だ

6. ごみの有料化に対する考え方

6.1 有料化に『賛成』は4割—どの市でもほぼ同じ

ごみ回収時の有料化に対する賛否を市ごとに見たのが図 6.1 です。いずれの市でも、もっとも多いのは「どちらかといえば反対」となっています。「賛成」「どちらかといえば賛成」を合わせた肯定的な意見は4割程度となりました。分別方法など現在の取り組みは異なる3つの市ですが、有料化の賛否については、ほとんど同じような回答が得られました。

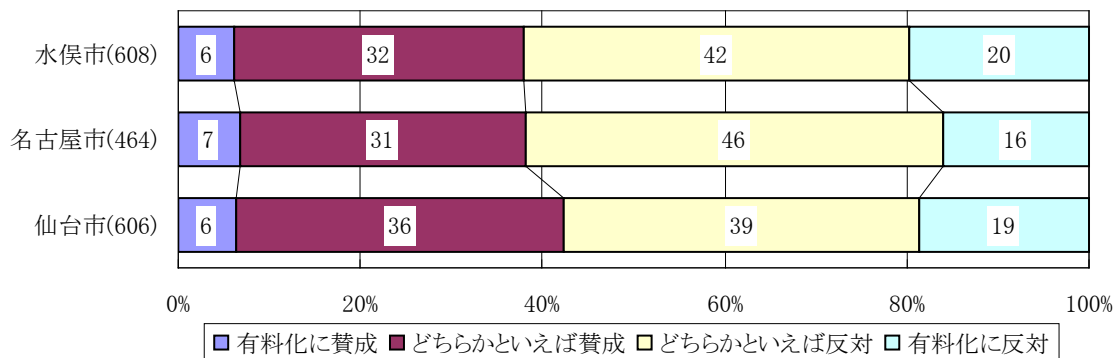


図6.1 有料化に対する賛否

6.2 予想されるメリットと懸念が有料化の賛否に影響

具体的に、ごみ処理有料化の様々な側面についての回答を見てみましょう。

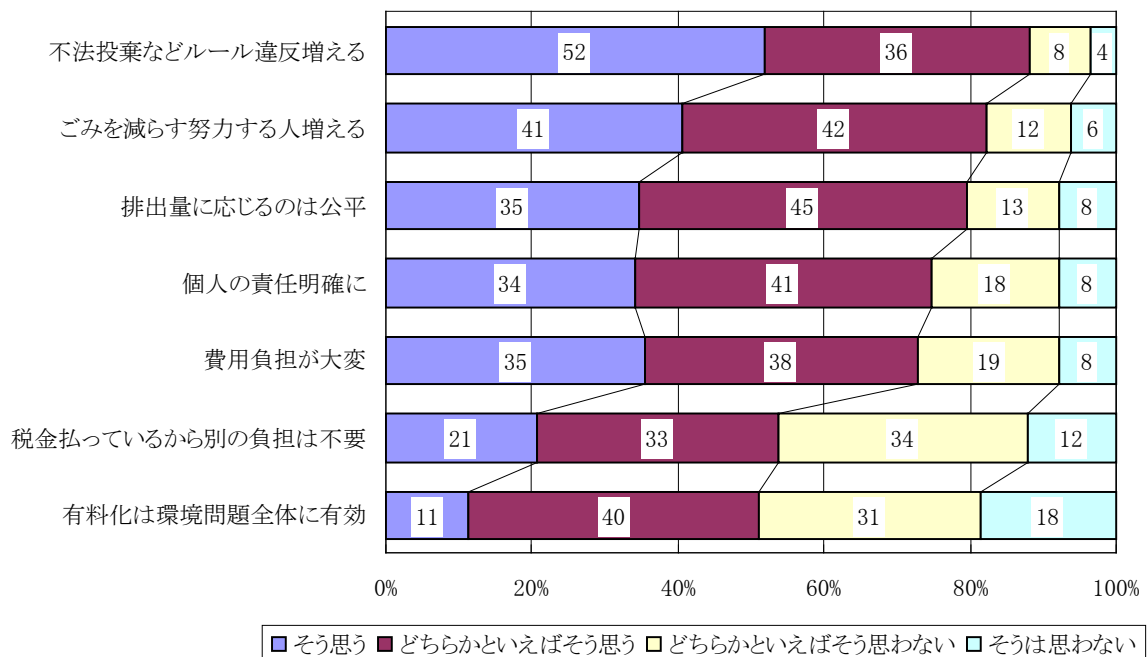


図6.2 有料化に対する意識(仙台市の場合)

これらの間でも市ごとの違いはほとんど見られなかったもので、ここではスペースの都合もあり仙台市の場合を図 6.2 に示しました（例えば「不法投棄などルール違反が増える」に「そう思う」という人が水俣市では 44%で仙台市の 52%や名古屋市の 51%よりも若干少ない傾向がありました。他の間における市による違いは、この例よりもさらに小さくなっています）。

これによると「ごみを減らす努力をする人が増える」、「排出量に応じて負担するのは公平」、「有料化でひとり一人の責任が明確になる」など、メリットを肯定する回答が 7 割から 8 割を占めていますが、その一方で「不法投棄などルール違反が増える」、「費用負担が経済的にたいへん」といった懸念をもつ市民も多くなっています。

「税金を払っているから別に費用を払う必要はない」「有料化は環境問題全体の解決に役立つ」に関しては、肯定する意見と否定する意見がほぼ半々に分かれています。そこで、この 2 つの意見と、有料化に対する賛否の関係を見てみましょう（図 6.3、図 6.4）。

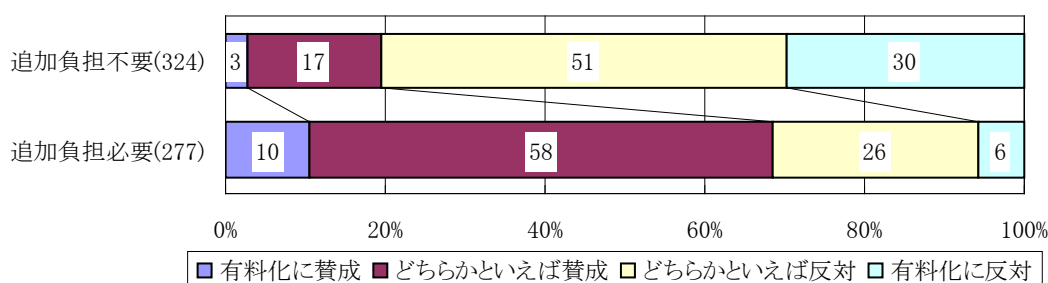


図 6.3 「別の負担は不要」への回答と有料化に対する賛否
(仙台市の場合)

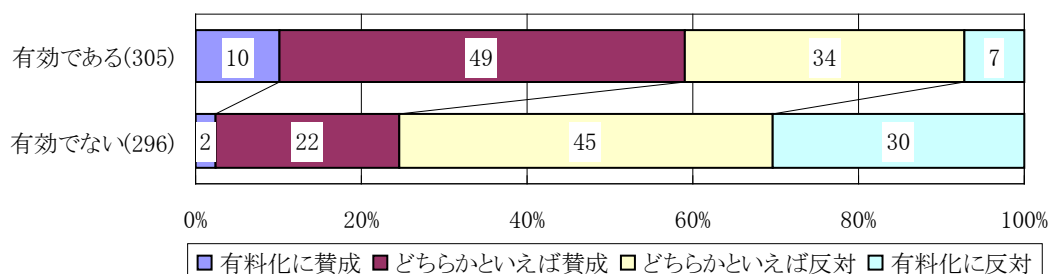


図 6.4 「環境問題全体に有効」への回答と有料化に対する賛否
(仙台市の場合)

ここでは「税金を払っているから別に費用を負担する必要はない」「環境問題全体の解決に役立つ」への回答のうち「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」と「そうは思わない」をそれぞれ合併しました。図を見ると、「別に費用を払う必要はない」と思う人は有料化に反対し、「環境問題全体の解決に役立つ」と思う人は有料化に賛成する傾向がはっきりと表れています。

このように、有料化に対する意識には市による違いは見られませんが、有料化にどのようなメリットを感じるか、あるいはどのような懸念を持っているかによって、その賛否が分かれています。

7. いろいろな環境配慮行動の実行率

7.1 都市によって実行しやすい環境配慮行動は異なる

最後に、いろいろな種類の環境配慮行動の実行率を見てみましょう。図 7.1 をみると、「使っていない場所の消灯」「油を排水に捨てない」「詰め替え商品の購入」「排水口のごみ受け設置」といった行動は、水俣市、名古屋市、仙台市の各市において多くの人が取り組んでいることがわかります。これに対して「石鹼の使用」や「エコマーク商品の購入」はどの都市においても実行率が低くなっています。都市ごとの違いがみられる行動としては、「風呂の残り湯の使用」「徒歩や自転車での移動」「生ごみを肥料として使用」「買い物かご・布袋の持参」「公共交通の利用」が挙げられます。このなかで、とくに公共交通に関しては、名古屋市や仙台市のほうが利用しやすいという現状から、両市の実行率のほうが高くなっていると解釈できます。これに対して、「生ごみを肥料として使用」や「トレー包装の野菜の不買」は水俣市の実行率が高くなっています。生ごみを肥料として使用することに関しては、水俣市では市が生ごみの収集を行っていることや、水俣市のほうが農地等の割合が高いためであると考えられます。また、トレー包装の野菜の不買に関しては、水俣市の婦人団体が長年推し進めてきた運動の影響もあるのではないかと考えられます。

以上から、人々の環境配慮行動がそれぞれの都市の環境政策に影響されるとともに、地域の市民活動・住民活動の影響も受けている、ということが垣間見られます。

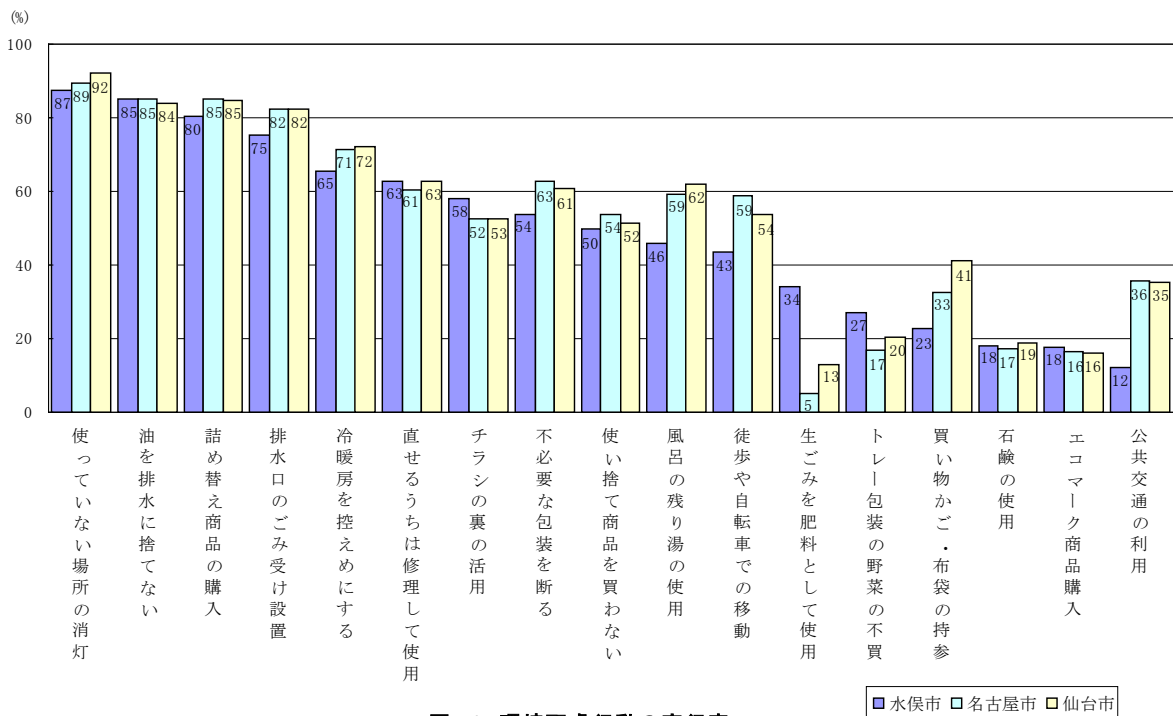


図7.1 環境配慮行動の実行率

以上、調査結果の概略をご報告いたしました。ご関心をお持ちの方は、生活環境研究会のホームページ(表紙にアドレスの記載あり)をご覧ください。